

高津山荘の出来上がるまで

藤本 勇

私の家内は高津高校13期卒で、在学中は山岳部に属し、通称「アネサン」で部員の人々から愛されていました。彼女と結婚にいたるまでの間には挫折の時期もありましたが山森先生の媒酌で昭和39年に結婚しました。新婚当時は南田辺で暮らして、元気な山岳部の後輩が毎週のようにやってきては酒を酌み交わして山の話をしていました。安月給のサラリーマンでは後輩の面倒も十分には見れず、家内は実家の親に電話しては駅の改札口で小遣いをもらっては生活費に充てていました。

山岳部の創設者の高村泰雄君は京都大学学士山岳会からチョゴリザ北東峰(7654m)、サルトロ・カンリ(7742m)の登山隊に参加しサルトロカンリの初登頂に成功しました。私は大阪市大山岳会のランタンリルン(7245m)の登山隊に参加。2名のヒマラヤ経験者をもつ高津山岳会(山岳部のOB会)として6000mクラスのヒマラヤ未踏峰の登山をやろうという計画が出ました。しかし、海外遠位に出るにはまだ実力がともなっていない。財政的にも貧弱で、外貨事情もまだまだ厳しいなかでは登山隊を海外に出すところまではいかなかった。また、例え実現出来ても一部の会員の登山となってしまう。

ある日の夕刊に「グループで別荘を持とう」という広告が目に入った。その時、稲妻のようなものが走った。数年前に京大の笹ヶ峰のヒュッテを借りて春山合宿をして楽しんだ経験から高津山岳部単独で山小屋を持てれば最高と思った。ヒマラヤ登山に燃えていた若手の連中も山小屋建設に熱をいれてくれるだろうと思った。

山小屋の土地は

1. 大阪から近距離のところ
2. 冬には雪が積もるところ
3. 高齢になっても行けるところ
4. 自然が残っているところ
5. 小屋の近くで飲み水が確保できるところ
6. 登山コースから少し離れたところ

以上の点を考慮して場所を選定した。第一候補は比良山系、ついで鈴鹿山系や大峰山系なども上がったが、最終的に比良山系が一番となった。当時は、まだ私鉄の江若鉄道が琵琶湖の西岸を走っていたが、JRが「湖西線」を開通する計画が発表された。すると大阪からは便利になって比良に行きやすい。

比良山系の中でも最高峰の武奈ヶ岳（1214m）には京阪電車がスキー場を開発し、年中リフトが運転されているのが魅力だった。リフトとゴンドラを乗り継いで降りた地点には「比良ロッジ」があって、そこから徒歩で40～50分の場所に山小屋を建設することに決定した。登山道から少し離れて野生動物、イワナ、高山植物、山菜なども取れる。

学校から資金の援助を受けると生徒の林間学校などで利用されたり、生徒単独での利用などで事故や小屋の荒廃が心配された。資金はすべて自分たちで賄うことにして最低100万円を集めた。当時の100万円は小さな土地なら購入できた金額であった。高村君はフィリピンの研究所で滞在中だったので実家まで押しかけて寄付を願った。

建設用地は比良村の村有地であって賃貸契約をして借りられた。年間で10000円程度の賃料であったと思う。

大工さんは家内の実家が蚊帳の製造販売をしていて、夏場は仕事がないので毎年、琵琶湖の湖岸の一軒家を借りて遊んでいた。そのとき知り合った中村種三さんが琵琶湖で水泳客専門の小屋を作っていたので、彼に建築を頼んだ。毎日、雨が降ってもリフトに乗って現場まで往復してくれた。手間賃をどれだけ払ったかは記憶にない。

建築資材はすべてバスの終点から比良ロッジまでの間にある資材用のリフトを契約して荷揚げを行った。材木は村尾君の世話で朽木村の林業組合から融通してもらった。彼が「比良山荘反省録」で書いておられるように、材木は原木そのもので重さは大変だった。1本70キロほどはあったと思う。その重い柱材をヒマラヤで使ったジュラルミンの背負子が壊れてしまった。スキー場を運ぶ時は一人で背負子にくくりつけて歩くが、一度歩き出すと休憩のときは腰をおろせない。腰をおろしてしまうと一人では立てないからだ。スキー場からは二人一組で山道を運び上げた。

建築は昭和41年7月20頃から始まった。大学生だった故長谷川譲一君と高野隆夫君は40日もの長期にわたって現場でテント生活をしながら大工の手伝いをしてくれた。彼らの食料の補充と資材の荷揚げで毎週週末は比良に出かけた。最初、建築資材を見て、これだけの物量を果たして、我々だけで荷揚げが出来るかと心配した。しかし、毎週荷揚げにきて工事の進捗状況を見て棟が上がり、山荘の姿が出来上がっていくと喜びに代わっていった。畳や建具などの荷揚げには山森先生にもお手伝いして頂いた。

木造2階建て、建坪13坪の山荘が完成し、9月11日に初代の顧問の秋山先生、加藤先生、山森先生、荒木先生らのご出席で盛大に祝賀式が開催できたことは一番の思い出であった。



高津山荘が出来てから比良には何度通ったことか。新緑の山の空気を吸い、夏には山荘前の沢で岩魚を取ったり、そーめん流しに興じ、秋には静かに山想いにふけり、冬には腰までのラッセルの中を訪れて屋根の雪下ろしをしたりした。雪が降る前には山麓で薪を購入して大勢の人達が薪の荷揚げに参加していただいた。

私の母校の大阪市立大学山岳会の有志の方々が自分たちの小屋であるごとく、山荘の利用から維持管理まで手伝ってくれた。特に秋の薪荷揚げには大勢の人達が集まってくれて勤労奉仕を惜しみなくやってくれた。大学山岳会のメンバ

一の中から「自分達だけの山荘」建設の声が一段と高まり、ついに信州の駒ヶ根に車に入れる別荘地にログハウスを建設するに至った。下記の URL をクリックしてもらえばヒュッテの様子が分かります。

<http://www.ocuac.org/index.htm>

高津山荘は建設に携わった人たちには青春のシンボルだった。40数年の風雪に耐えたが平成5年の豪雪で山荘の梁がおれ修理不可能と診断されて解体を余儀なくされた。不燃物などはヘリコプターを使っておろした。跡地は釘一本のこさず綺麗な更地となった。

